

諸

家

の

寄

稿

加藤玄智先生の学徳を仰ぎまつりて

加藤玄智博士記念学会会長
明治神宮宮司 高澤信一郎

加藤先生が帰幽なさって早くも二十年、今、先生の尊い学徳を仰ぎまつる此の秋、しみじみと身に感銘を覚ゆるのであります。

昭和二年春に國大入学、同八年卒業に至る学生時代の思い出は、まことに楽しい夢の青春であった。

先生の御講義は宗教学の時間に、神道発達の歴史を宗教学史の立場から理解し易く説明して頂き、神道の基礎的勉強の上に、大変に役立つ授業であった。

短髪温顔にして近視の眼鏡を透して極めて優しい眼指し、そして小づくりで撫肩の御人柄は、坊さんの袈裟を召せば立派な大僧正の人品であられた。

加藤玄智先生の学徳を仰ぎまつりて	高澤信一郎
加藤先生	安津素彦
加藤玄智先生の思い出	副島廣之
加藤玄智先生の想い出	鎌田純一
学芳窟の遺芳	望月真
加藤先生の学恩を偲んで	鎌田太一
加藤玄智先生のこと	上田賢治
加藤玄智先生の追想	石川軍治

○

神道研究を現代的世界的立場から啓蒙下されたのは加藤先生の御指導に俟つ処が大であつたと思ふのである。

大学生時代に続いて道義研究室助手時代を経て、明治神宮奉仕始の昭和十年から終戦に至るの間、明治聖徳記念学会の会員の一人として、一ツ橋の学士会館に於ける例会で、広範囲に亘る學術講演会の司会を勤められた加藤先生の真摯潑刺なる御姿、そして確実に続刊された同会の紀要の価値高き貢献度、皆、加藤先生の御精勤に依る処と感を深くいたすのであつた。

昭和二十年の終戦後、同学会は解散の止むなきに至り、関係圖書を明治神宮へ御奉納になられた先生の御意図には、其の学会の今後の使命を神宮に委托なされたことと拝察されるのであつた。

はたせるかな、先生逝かれて十年、昭和五十年の五月、十年祭齋行を記念して、先生が御生前に育成なされた藤玄会を母胎として、加藤玄智博士記念学会の発足となつたのは、会員各位の御承知の通りである。

しかも其の事務所を明治神宮社務所に置かれ、会長の

大任を宮司が承り、現在では伊達前宮司に継いで不肖私が弱肩に其の大任を背負うて居る次第。

毎年一回、細々ながらも会誌の続刊に力めて参つたが、其の成績上々とは申せませず、殊に本年先生の二十年祭に当りましては、記念の大会も計画されず申訳なく、茲に先生の思ひ出の記を募つて、此の重要な年に際し、今こそ加藤先生の冥助を蒙りて、本那生祠の更に更に拡充研究調査を始めとして、神道全般に亘る諸問題の究明に鋭意努力邁進を期すべく、会員相互に決意を固めねばならぬと存する次第です。

然るに此の重大なる年に当り、国書刊行会に於かれましては、加藤家と御相談の上、先生の名著『本那生祠の研究』を復刻出版せられ、而も時恰も天皇陛下御在位六十年奉祝の佳歳に当り、此の挙は神道界への覚醒に大きな功績と高く評価されるのであります。

今こそ先生の気高く強堅なる学問研究への歩調に合せ、会員各位、奮つて協力邁進いたそうではありませんか。